

---

# **悪魔に操られ**

宮城 龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔に操られ

### 【Zマーク】

Z5601P

### 【作者名】

富城 龍

### 【あらすじ】

私が生きる世界。それは悪魔によって操られていた。悪魔の正体とは……。一人の教師が真実へと立ち向かう。

私が生まれたこの街に、新たな一步を踏み入れる。かなり見慣れたこの家に、新たな一步を踏み入れる。あの時の私の背丈に合わせたこのドアノブ、腰を曲げてゆっくりと開く。

そこに、私の知らない真実がある。

思考が止まっていた。すきま風が今年の寒冬を知らせる。ストーブの火をつけ、ソファに腰掛ける。また思考を開始させる。

『なぜ俺は、ここにいるのか……』

「幸男兄さん、さつきから何を考えてるの？」

弟の存在に気付き、はっとする。時々、訳もわからない自分が、私の中になっては質問をぶつける。

『俺は、誰なのか……』

「ミルクでもいれようか

頼む。そう言い、昔のにおいがするテーブルの上から新聞を取る。最近ニュースがないからか、その活字が寂しく見えた。

「ここに置いておくよ。熱いから気をつけてね」

私はミルクに手をつける。弟は昔から私の世話をしたがった。嫌ではなかつたが、疑問は今でも消えていない。私？馬渢幸男？の中には、何者かの存在とともに、疑問が脳を旋回する。

三十を越えた私は、五歳下の弟？義男？と、亡き祖父が残してくれた別荘で、一人暮らしをしている。静岡の山の中には、私が勤めている山野中学校までの道のりが大変だが、この場所をとても気に入っていた。ここに引っ越したときは、義男とともに、はしゃい

で朝まで飲んだほどだ。明日で生徒は冬休みが終わる。この冬休み、私が受け持つている三年二組の生徒は、しつかり受験勉強に励んだのだろうかと、毎日心配していた。初めて三年生の担任を任せられ、最初は戸惑つたが、三年生の生徒は皆、目標を見つけ落ち着いていた。それを見て、しつかり支えようと心に決めていた自分が、今は懐かしい。ミルクを飲み終えると、明日の準備に取りかかる。義男はすぐ近くの工場で働いており、冬の間はしばらく仕事がないそうだ。テレビを見ながらのんびりとする義男を羨む。

「明日から生徒が登校なんだっけ？」

「そうだ」

「がんばってね」

そう言い、すぐにテレビに突っ込む我が弟がバカバカしく見えてくる。準備が終わり、次は風呂に入る。これは教師になってから、私の中の決まりになっていた。

「風呂に入つてくる」

「はあい」

義男の気のない返事を聞くのも、お決まりだ。壁がヒノキでできた風呂が、この別荘での一番のお気に入りだった。ひとつ深い呼吸をし、どつぱり肩までつかる。足を伸ばし天井を見る。天窓も設けられているこの風呂、星が見える夜は、長風呂していた。今日は……雪か。雪が天窓に積もり、白く光っていた。またひとつ、呼吸をし、頭を洗う。義男が買うシャンプーは、センスがあるらしい。いつも生徒に、いいにおいと言っていた。冷えた頭をしつかり洗う。浴びるお湯が気持ちいい。

「あがつたぞ」

次に義男が風呂に行く。その間に、酒のつまみを用意する。義男があがると、一人で酒を飲む。たわいない会話をし、晩酌を楽しむ。そして、針がてっぺんで重なるになる前に就寝する。これもお決まりのパターンだった。

「兄さん、朝だよ」

義男の声で目を覚ます。いつだつたか、目覚まし時計を使わなく  
ても僕が起こすよ、とこいつが言い出してから、それに頬つていて  
いつたい、どこまで私の世話をするのだろうか。

「いいにおいがするな」

「今日から兄さん、また生徒を相手にするから、朝飯はりきつた  
んだ」

「そうか」

体を起こす。水が落ちる音が聞こえる。窓を見ると、上方に氷  
柱ができていた。着替えを済ませ、リビングへと向かう。

「朝から天ぷらかい、義男」

「兄さんの好物だからね。腕によりをかけたよ」

「ほお。なら食わせてもらいうぞ」

一口。いつもの味だ。甘みがにじみ出る。義男の料理はいつも最  
高級の美味さだった。小さい頃から母親の料理に興味を持つていた  
義男。私は台所で手伝つたこともなかつた。私は基本、外で遊んで  
いたが、義男は家で真面目に宿題をし、終わるといつも母親を手伝  
つっていた。そんな弟だつたから、母親は義男ばかりを可愛がつてい  
た。まだ小さかつた私は、小さなながら傷つき、よくちよつかいを  
出し義男を泣かせていた。そして私が高校三年の時、母親が病気で  
死んだ。誰よりも泣き叫んだのは弟だつた。私もつられて泣いた。  
それからは父親と私と弟の男三人で暮らした。父親は教師だつたか  
ら、金には困らなかつた。そして金よりも助かつたのは、弟の完璧  
に近いほどの家事だつた。朝から朝食を作り、洗濯をし、中学校か  
ら帰ると、掃除をし、夕食を作つた。そんなわけで父親もまた、義  
男をよく可愛がつた。父親に私が教師になりたい思いを告げても、  
あまり喜んではくれなかつた。きっと弟が教師を目指していたら、

相当喜んだに違いない。

「美味かつた。じゃあ行ってくる。留守番頼むぞ」「行つてらっしゃい。留守番任せて」しつかり着込んだつもりだったが、予想以上に外は寒かった。この別荘に越してから買った４ＷＤに乗り、山道を下る。いつも見る野ウサギも、さすがに冬眠をしているのだろう、一匹も見ることがなかつた。

車で約二十分、山の麓に山野中学校はあつた。

「おはようございます」

すでに職員室にいた校長に声をかける。今日の始業式の言葉だろうか、紙切れを真剣に読んでいる。その顔をあげ、おはようと一言返事をし、また紙切れに目を落とす。

私のデスクはちょうど真ん中あたりにあつた。腰をかけ、インターネットを繋ぐ。今日のニュース……たいしたことは書かれていたなかつた。ニュースチェックはいつもこのようにしてやつっていた。

「馬渕先生」

声をかけられ回転式の椅子を180度声の方へ向ける。

「おはようございます。今日の学年集会、どうしまじょうか」

「そうですね……。一応私が受験に向けた話をしますので、他に先生方から何かあれば、話をしてもうことにしまじょうか」

私は三年生の学年主任を務めていた。残りわずかな時間でどれだけ集中できるか、それによつて自分の進路が決まる……くらいのベターな話でもするか。

八時を回つたころ、席を立ち教室へ向かう。遅刻ぎりぎりの生徒たちが廊下を走り抜けていく。

「起立。礼」

私が教室に入ると、学級委員の吉岡が号令をかける。それに合わせ生徒が挨拶をする。

「あけましておめでとうございます。この冬休み、みんな勉強は

頑張ったか

そう言いながら生徒の顔を見る。うん、頑張ったようだな。ほとんどの生徒が活き活きとした顔をしていた。

「いよいよ今年は君たちの進路を決める受験があるな。これからが本番だ。しつかり自分を高めて最後まで気を引き締め頑張つていこう」

今日の日程を説明し、始業式が行われる体育館に向かわせる。生徒はお年玉の話でもしているのだろうか、びっくりした顔や、勝ち誇ったような顔など、様々な様子で体育館に足を運んでいた。

さて、いつたん職員室に戻るか。

校長の話は長かった。受験勉強だとか、人生だとか、いまいち何を言いたいのかわからない。生徒の中にも下を向いている者が多数いた。そんな生徒の頭を叩いている、鬼教師がいる。四十歳くらいの塚原先生だ。教師の間でも近寄りがたい存在だ。

ふと、耳鳴りがした。

『俺はどこにいるんだ……』

またきた。なんなんだといったい。ひとり考え込むように頭を抑える。

「馬渏先生、どうかされましたか」

いえ、大丈夫です。と答えるながら、激しい頭痛が私を襲っていた。

『苦しい……苦しい……』

目の前が真っ暗になるのが自分でもわかつた。

気付くと私は保健室に寝かされていた。

「大丈夫ですか」

保健室の小野先生がカーテンを開け心配そうに見ている。

「私はなぜここに……」

始業式中に倒れたんですよ、と言いながら頭に置いていた濡れタオルを氷水で絞ってくれた。そうか、私は倒れたのか。

チャイムが聞こえた。とほぼ同時にダダダッと足音がこちらへ向かう。

「馬渥先生！大丈夫ですか」

一組の生徒たちだ。素直に嬉しかった。私は生徒に愛されていたのだ、と初めて実感できた。こういう生徒の存在が、教師のやりがいであろう。そして生徒たちに夢や希望を与え、その道を照らしてやるのが教師の目的ではなかろうか。

「すまんな、お前らに迷惑をかけてしまった。帰りの会までには教室に戻るからな」

生徒は満面の笑みで保健室を出て行った。小野先生もまた、にっこりと笑い、いい生徒たちですねと言った。本当にいい生徒だ、と私は胸を張つて答えた。

始業式から一週間がたつた。

私が生徒たちの実力テストを採点を終えたばかりで、休憩に一服していたところに塚原先生が声をかけてきた。彼はヘビースモーカーなのだろう、私がたまにしか来ないこの喫煙所でいつも煙草を吸っていた。

「馬渉先生、一組の生徒はどうですか」

威圧感のあるどっしりとした声。そして巨大な体。私は若干身を引いた。受験のことを見ているのだろうと思い答えた。

「しっかりとやっているみたいです。今回の実力テストの結果もとても良かつたですし」 そうか、と煙を大袈裟に吐き出し、そして、大あくびをして立ち去っていった。

私はひとつ忘れていたことを思い出した。一組には一人だけ問題児と呼べる生徒がいたのだ。塚原先生はきっと、その生徒についてなにか聞きたかったのかもしれない。

その生徒は？ 吉井和将？。そういえば今学期一度も顔をみていない。とりあえず自宅に電話しよう。そう思い、吸い始めたばかりの一本目の煙草を灰皿に押しつけ職員室に戻った。

誰も出なかつた。この場合家にいくしか方法がない。このパターントで家に向かうのは、もう数え切れないほどになつていた。校長に一言告げ、授業を受け持つていらない昼からの時間を使い、吉井の家へと向かつた。

吉井の家は金持ちである。殺風景なこの平地にひとつ大きく目立つ別荘、これが吉井の家だ。鉄製の門の前に設置されたインターホンを押す。そこから流れたのは、私が来ることがわかつていたかのように、面倒くさそうな返事であった。

「和将か。馬渉だぞ」

そう告げると、今日は風邪だ。という見事に仮病らしい、いや、仮病だと知らせるようなはつきりとした口調で和将は答えた。

和将の父親は石油会社の社長であり、基本的にその妻も日中、家にはいない。和将はこの別荘を自分の部屋のように自由に使っていた。もちろん学校に足を運ぶことは滅多にない。両親も息子には無関心のようで、学校に来るよう説得してもまったく聞く耳を持たない。私はほとんど諦めている。しかし中学校は義務教育なのだ。欠席日数が多くなる。担任の私が面倒をみなければならない。

「和将、お前受験はどうするんだ」

「関係ねえよ。親の金で食つていく」

「いつまでも親に頼つてばかりでいいのか」

「うるせえ、馬鹿野郎」

そのときだった、私の脳裏から私を支配する声が聞こえたのは。

『俺が馬鹿野郎……？ ふざけるな。お前の体を貸せ』

そのまま私は、私ではない誰かに支配された。

勝手に鉄製の重い扉を私の手で開く。この支配に私は負けている。この足が、その扉に確実に近づいていく。

「先生っ！ なに勝手にあがりこんでんだよ！」

和将の慌てた声。もう私は、私ではなかつた。

広い玄関に置いてある高級そうな花瓶をたたき割る。目の前で止める和将を押し倒し、リビングに土足のまま入り込む。椅子を蹴飛ばす。大型テレビもグランドピアノも、目に入るもののすべてを蹴つたぐる。まるで猛獣のように、いや、それはもう猛獣と化していた。ふと、窓を見た。いつからか降つてきていた雪が赤く見えた。パトカー……直感でわかった。和将が通報したのだ。こちらに近づいてくるサイレン。脳は叫んだ。逃げろ！ と。

気付いた時には、私は元の私となっていた。しかし私は、コンビニで買った帽子を深々とかぶり、一緒に買ったマスクを付け、暗闇を一人歩いていた。脳は覚えていた。私は犯罪を犯したのだ。逃げる際、和将を刺していた。心臓に突き刺さった。一瞬だ。一瞬で私

は、生徒を殺した。私ではない私が、犯罪を犯した。

道は一つしか与えられなかつた。脳の命令だ。私は逃げる。逃げ続ける。車に置いていたラジオとコートの内ポケットに入れている財布だけを持ち、すべてを捨ててきた。面倒を見ててくれた弟、まだまだ可愛らしさが残る純粹な生徒たち。私は教師としての役割を捨て去り、一人の生徒の命を奪い、たくさんの生徒の受験に向けた努力を踏みにじつた。保健室で生徒が見せてくれた心配する顔が蘇る。私は愛されていた、そう心から思えたのに。申し訳ない気持ちが込み上げ、嗚咽が漏れる。しかし、もう戻れはしない。そう。私は、犯罪者。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5601p/>

---

悪魔に操られ

2010年12月18日14時45分発行